

校注『慈鎮和尚自歌合』稿(Ⅱ)

石川 一

本稿は「慈鎮和尚自歌合」後半の八王子・客人・十禅師・三宮の四社を範囲とした。

〔凡例〕

- 1 底本は永青文庫本に拠り、できるだけ忠実に底本の原態が復元できるように努めた。
- 2 漢字を宛てた場合は、底本を振り仮名の形で表した。
- 3 難解な語句には読み仮名を付け、()で囲んだ。
- 4 本文に問題のある箇所については、(ママ)を付し、注で他伝本の本文で修訂した。
- 5 歌番号は『校本拾玉集』に拠り、『新編国歌大観』番号を半角で併記した。

八王子十五番

一番

左持

94 山川の底にや誰も沈まゝし千々の手ごとに渡さざりせば

右

摂政

95 枯れはつる梢に花も咲ぬらし神の恵みの春の初風

左の哥、千手誓願の心、まことに頼もしく侍る事なり。右の哥、「神の恵みの春の初風」、又、そのしるしたちまちに見えぬべく覚え侍れば、いづれを勝るとも申がたく侍らへに、神事の番ひはしひて勝負有べからず侍し也。

▽八王子：神体は国狭槌尊。一説に天照大神の八人の王子。本地は

千手観音。

94 拾玉集(未見) ○山川(やまがは)：山の中の川。清音だと

「山と川」の意。○沈まゝし：反実仮想。沈むことはないだろう。○千々の手：千手観音の比喩。○渡さざりせば：「渡す」は仏の力で此岸から彼岸へ行かせる。煩惱から救済する意。

▽千手観音は千の慈眼と千の慈手を持ち、多くの衆生を救済する。

95 秋篠月清集：神祇一五八七(第三句「さきぬべし」) ○咲ぬらし：咲いてしまっているらしい。異文「さきぬべし」では咲いてしまうに違いないの意。下句はその原因理由を示す。

○千手誓願：本地の千手観音に対する誓願。○しるし：御利益。靈験。○見えぬべく：見えてしまいうに違いない。○しひて：むやみに。

二番

左勝

96 おしなべて日吉の影は曇らぬを涙あやしき昨日けふ哉

右

97 願はくはしばし闇路に休らひて掲げやせまし法の灯火

此両首こそ、まことに涙あやしき程におぼえ侍れ。おほかたは哥合の判はことに誉めず、ことに難せずとかやぞ、様々しく申物は申ことに侍れど、よろしきを不称讃は無詮事也。右哥の心、又愚老が心願や起る所の趣也。その心すでに聖真子の十五番の奥に申出しぞ。たゞし、猶左の「涙あやしき」と侍末句、勝ると申さずはいかゞ覚え侍て、

勝(まゐる)とや申(まをす)べく侍らん。

96 拾玉集・廿題百首・神祇二一〇一(ナシ)、新古今・神祇一九〇三(第三句「曇らぬに」) ○おしなべて…一様に。総じて。○日吉…比叡(ひえ)に宛てた字を「ひよし」と読んだもの。日吉山王権現のこと。「日」は「影」の縁語。○曇らぬを…曇らないのに。異文「曇らぬに」も同意。○涙あやしき…不思議にも、涙で曇って見えない。▽昨今の身の不遇を嘆じるもの。

97 拾玉集(未見)。新古今・釈教一九三一 ○闇路…煩惱を無明の闇に喩える。○休らひて…しばらく留まつて。○法の灯火…作者慈円が座主を務めた比叡山の不滅の法灯。「灯火」は「闇路」の対。「明らけく後の仏のみよまでも光伝えよ法の灯火」(新拾遺・釈教一四五〇 最澄「比叡山の中堂に、初めて常灯ともして掲げ給ひける時」)

○愚老…判者俊成のこと。○心願…心の中で神仏に願をかけること。その願い。○聖真子の十五番の奥…88番歌、及びその後の左注。

三番 春の比、大乘院より人のもとへ遣はしける

左持

98 見せばやな志賀がの唐崎がふもとなる長等がの山の春の景色を

春の哥中に

右

99 かをりくる花の春風身にしめて山越こえくらす志賀がの宮人

左「長等がの山」、右の「志賀がの宮人」、所さま・面影ををかく、哥の姿すがた・言葉ことば共に勝劣なく侍れば、同科とすべし。

98 拾玉集五六四3334、新古今・雑一四六九、秋篠月清集一〇三六
本歌「心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春の景色を」

(後拾遺・春四三 能因) ○大乘院…比叡山の東塔、無動寺にある作者の住房。○人のもと…家集によれば甥の藤原良経。

○志賀の唐崎…近江国の歌枕。無動寺東麓の湖岸。○長等の山…近江国の歌枕。三井寺の背後にある山。花の名所。「さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」(千載・春六六 平忠度)

99 拾玉集三二八五2972 ○花の春風…花の香りを乗せた春風。○しめて…占有して。○山越えくらす…山越えなどをして常日頃暮らす。都の北白川から如意が峰を越えて志賀里に出る道を「志賀山越」という。○志賀の宮人…「志賀の都」は天智天皇の大津宮をさす。今でもその里に住む人を「宮人」と称したか。

四番 春の歌の中に

左勝

100 空も海もひとつに霞かすむ波路なみち哉海人の釣舟つりふね帰る雁かりがね金

帰雁

右

101 涙をや霞の袖に貸かしつらん春に別わかれて帰る雁かりがね金
「春に別れて」といへる姿すがた、まことに「霞の袖に」涙掛なみかるらんと覚え侍わを、「空もひとつに霞む浪路」、眺望の心こころ・思おもひかけ、ことにをかしくや侍らん。

102 拾玉集・北山樵客百首・春一八一717 ○ひとつに霞む…空と海が一つに融け合い、ぼんやりと霞んでいるさま。○海人の釣舟…漁夫が釣りをする舟。○帰る雁金…春分のころ北の地方に帰る雁。▽空と海が融け合う様を、その代表的景物としての釣舟と雁金を提示する。

103 拾玉集・四季雑各廿首都合百首・春三二八八2975 ○霞の袖…霞を衣装に喩え、そのたなびいた端を袖に見立てたもの。「行く春の

霞の袖を引きとめてしをるばかりや恨みかけまし」(長秋詠草二〇) ○貸しつらん：貸したのであるうか。○春に別れて：春という季節に別れを告げて。○帰る雁金：春分のころ北の地方に帰る雁。

五番 夏哥よみける中に

左勝

三〇 曇る夜の月に喩へん郭公鳴かて果てぬる五月雨の空

夏夜

右

三〇 夏の夜の数にも入れじほとゝぎす来鳴かぬ先にあくるしのゝめ
左哥、月に比へんといへる心、又ことに珍らしく侍にや。

勝り侍べくや。

三〇拾玉集・北山樵客百首・夏一八三九(三〇)(第四句「なかではれぬる」) ○曇る夜の月：月が雲に隠れて見えない喩え。○鳴かて果てぬる：鳴かないで死んでしまった。異文「なかではれぬる」では鳴かない間に空が晴れてきたの意。▽「果てぬる」の主体は郭公だが、「はれぬる」だと主体は空に移る。

三〇拾玉集・歌合百首・夏夜一七四〇(1640)、六百番歌合・夏二四〇、三百六十番歌合・夏一七八 本歌「夏の夜の臥すかとすれば郭公鳴く一声にあくるしののめ」(古今集・夏一五六 貫之) ○数にも入れじ：(こんな夜は)夏の夜の数にも入れまい。○来鳴かぬ先：やって来て鳴き声を上げる前に。

六番 月の哥、あまた詠みける中に

左勝

三〇 三日月のほのめき出る垣根よりやがて秋なる空の通路

海辺夕月を

三〇 難波がた満ちくる潮を光にて芦辺に宿る夕月夜哉
右
ほのめきそむる垣根よりやがて秋の通路ならん事、これもことにをかしく聞こゆ。勝ると申べし。

三〇拾玉集・花月百首・月一三五四(354)(第二句「ほのめきそむる」)、

玄玉集・天地一二六(第二句「ほのめきそむる」・三句「門田より」) ○三日月：陰暦の第三日の夕方、中天に出る月。○ほのめき出る：ほのかに空に現れる。異文「ほのめきそむる」ではほのかに現れ始めるの意。○垣根：異文「門田」は屋敷の回り、特に門の前の田の意。○やがて秋なる：直ちに秋の情趣を感じさせる。○通路：行き来する道。「天つ風雲の通路吹き閉ぢよ乙女の姿しばしとどめむ」(古今・雑八七二 宗貞)

三〇拾玉集(未見) ○光にて：月の光を反射して、明るく光らせて。「光にて雲の家をも出でにしを照らし果てなん大空の月」(康賢王母集一四〇) ○芦辺：葦の生えている辺り。

七番 雁

左勝

三〇 いかにせん伏見の里の有明にたのむの雁の月に鳴なる

秋の哥中に

右

三〇 夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴く也深草の里
右
この右、崇徳院御時百首の内に侍り。これ又ことなる事なく侍り。たゞ伊勢物語に、深草の里の女の「鶉となりて」といへる事を、はじめて詠み出で侍しを、かの院にもよろしき御気色侍しばかりに、しるし申て侍しを、左哥、「伏見の里の有明に」月に鳴くらんたのむの雁、いみじくをかしくそ侍れ。左尤勝に侍べし。

積阿

108拾玉集・四季雜各廿首都合百首・秋三二二四3011 本歌「みよし野のたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる(伊勢物語・一〇段) ○伏見の里…伏見区伏見。巨椋池を中心とした地域。▽当該歌にも伊勢物語・一二三段の「鶉となりて」歌が下敷きとなつてゐる。

109長秋詠草38、千載・秋二五九、久安百首・秋八三八 本歌「野とならば鶉となりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ(伊勢物語・一二三段) ○夕されば…夕暮が迫ると。○秋風…「飽き」を掛ける。○身にしみて…男に捨てられた女の化身である鶉が感じている。話主が感じるといふ解あり(無明抄)。○鶉…荒蕪地にいる鳥。「憂」「辛」を掛ける。○鳴くなり…「なり」は伝聞推定の助動詞。▽捨てられた女の化身鶉の鳴き声。話主は現実と物語世界を往反しつつそれを聞く。

○崇徳院御時百首…久安六年(一一五〇)に奏覧された崇徳院主催の第二度百首。久安百首と呼ばれる。○ことなる事…特別であること。○はじめて詠み出で…私が初めてその事を本歌にして詠み出した。○よろしき御気色…崇徳院から蒙った叡感。

八番 秋の暮に

左勝

110 長月も幾有明になりぬらん浅茅の霜のいと寂びゆく

秋の霜を

右

111 紅葉葉はおのが染めたる色ぞかしよそげにおける今朝の霜かなよそげにおくらん霜、まことにをかしく侍を、又、左哥「幾有明に」といへる心、猶艶におぼえ侍り。又左勝るべくや。

108拾玉集・四季雜各廿首都合百首・秋三二二八3015、新古今・秋五

二一 ○幾有明…九月も晦日に近い頃で、秋の末でもある。○浅茅…丈の低いチガヤ。人里離れ、荒れた場所を形容するに用いる。○寂びゆく…「寂ぶ」は寂しさに「古び」「気高さ」などを含む情感。

109拾玉集・歌合百首・秋霜一七七九1679、新古今・秋六〇二、六百番歌合・秋四五八 参考「三秋岸雪花初白 一夜林霜葉尽紅(和漢朗詠・霜三六八 温庭筠) ○おのが…紅葉を擬人化して呼びかけた。○よそげ…他人事のような様子。○艶…上品で優雅な美しさ。余情美の一樣相。

九番 冬の哥中に

左勝

110 泊瀬山霜に応ふる夜半の鐘をもうくも誘ふ風の音哉

同

三 息長鳥猪名の旅寝の篠枕あられにたどる夢路なりけり

「猪名の旅寝の篠枕」、いみじくをかしく侍を、なほ泊瀬山の夜半の鐘をもうくも誘ふらん風の音、所さまも立勝りてや侍らん。

110拾玉集・北山樵客百首・冬一八九七1108、無名和歌集・冬二二二 ○霜に応ふる…霜に感応して鳴る。「豊山」有九鐘焉。是知霜鳴(山海經)の故事に拠る。「高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけて霜やおくらん(千載・冬三九八 匡房) ○もうくも誘ふ…「もし」は消えやすいの意。風が鐘の音を誘って消えやすくなる。

三拾玉集・御裳濯百首・冬五五三3033 ○息長鳥…息の長い鳥の意といい、鶉(かいつぶり)のことか。また、息長鳥が居並ぶことから、「猪名」に掛かる枕詞。○猪名…摂津国の歌枕。兵庫県川西市・伊丹・尼崎市を流れる猪名川の流域の野。○篠枕…篠を枕

とする旅寝。「猪名の篠原」に拠る。○あられたどる…あられ
の降る中を不案内な道を迷いながら行く。「しなが鳥猪名の笹原分
けゆけば払ひもあへず降るあられかな」(拾玉集二五八)

十番 寄閑恋

左勝

三 人恋ふるわれ眺めよと思ひけり須磨の関屋の有明の月

旅恋

右

三 東路の夜半の眺めを語らなん都の山にかゝる月影

「須磨の関屋の有明の月」、哥の姿も所さまも猶艶に侍べ
し。

三拾玉集・歌合百首・寄閑恋一七七四1574(第二句「わがながめよ
と」、六百番歌合・恋一〇〇八(第二句「わがながめよと」) ○

われ眺めよ…青連院本は「わか涙よと」「涙」見せ消ちで、「なか
め」の校異)。私が眺めるものとの意。「わが」に従うべきか。○
須磨の関屋：摂津国の歌枕。神戸市須磨区の海岸に播磨国との境
をなす須磨の関があった。「播磨路や須磨の関屋の板庇月洩れとて
やまばらなるらん」(千載・羈旅四九九 師俊) ▽西国への旅路
にあつて恋人を思う旅人の心。

三拾玉集・歌合百首・旅恋一七五五1555、新古今・羈旅九四二、六
百番歌合・恋九〇〇(第二句「よはのねざめを」) ○東路：東海
道・東山道など東国への道。○夜半の眺め：夜半に眺めている
空。異文「よはのねざめを」では夜半に寝覚めるとの意。○都の
山にかゝる月影：東路からは都は西にあるので、西の山に傾く月
をこう表現した。

十一番 海路

三 眺むれば霞も月も果てぞなき春と秋との波の通路

左勝

三 漕ぎ出て今は沖にも成ぬらん岸の松風こゑよわる也

右

両方の海路、心・詞共に勝負なくは侍を、左の春の霞・秋
の月・波路久しくなれたるほど、猶心ほそさも勝りてや侍
べからん。

三拾玉集・四季雜各廿首都合百首・雜三二六2309 ○霞も月も：
春の霞、秋の月、共に果てのないもの。○波の通路：波の行き来
する道。通路。▽春秋の海路は霞月によって心細さも格別に感
じられること。

三拾玉集・一日百首・海路九八五985 ○成ぬらん：(沖に)達した
のだろう。下旬にその原因・理由を述べる。○こゑよわる也：
(松風の)声が次第に弱くなったようだ。

○心ほそさ…もの寂しさ。マイナス評価ではなく、美的価値とし
て肯定されたもの。

十二番 山家

左

三 人はなし嶺に松風窓に月占めえてすめる山の奥かな

同

三 岡の辺の里のあるじを尋ねれば人は答へず山下の風

右勝

左の峯の松風・窓の月・山の奥のすみか、好もしくは侍を、
右の岡野辺はさまざま深からずは侍れど、人は答へざらん山
おろし、いみじく身に沁みて、少しは猶右勝るべくや。

116 拾玉集・四季雜各廿首都合百首・雜三二六〇3047 ○人はなし…

「松」「月」以外に友は居ないことを強調。○占めえてすめる…自分のものとすることが出来て、住み続けている。「る」は完了の助動詞「り」の連体形。「住め」は「澄め」と掛け、「澄め」は「月」の縁語。

117 拾玉集・楚忽第一百首・山家七九五95、新古今・雜一六七五 ○答へず…不在をさす。○山下の風…山から吹き下ろす激しい風。

十三番 山里

左持

118 山深みさびしき宿のあるじとは成りおほせたる身にも有哉

同

右

119 山里に問ひくる人の言草は木のすまひこそ羨ましけれ

二首の山居、左の成りおほせたらむ心もをかしく、右の「問ひくる人の言草」もさぞ申思けん、共に無勝劣侍べし。

120 拾玉集・日吉百首・述懐四七二472 ○山深み…山が深いので。

○さびしき…あるべきものが欠けていることによる物足りなさ、寂寥感。ここでは尋ねてくる人がないこと。○成りおほせたる…成り遂げてしまった。「果(おほ)す」はし遂げる、し終える。

121 拾玉集・北山樵客百首・山家一九七五1875、新古今・雜一六七一 ○言草…いつも口にする言葉。○うらやまし…自分の憧れで、是非住んでみたいといった気持。▽下句は尋ねてくる人の言葉をそのまま写したものの。軽妙洒脱な詠みぶりだが、世俗への痛烈な皮肉がある。

十四番 百首中に

左勝

122 人はみなあはれも知らで止みなまし秋の夕暮春の明ぼの

無常

右

123 蓬生にいつかおくべき露の身は今日の夕暮明日の明ぼの

左右両首、下句の姿・言葉同じく侍れど、左の「あはれも知らで止みなまし」といふ心、猶勝るべくや侍らん。

124 拾玉集・御裳濯百首・雜五八一581 ○あはれ…哀愁の情趣。○

止みなまし…世を終えたことであろう。「恋してふことをも知らで止みなましつれなき人のなき世なりせば」(後拾遺・恋六四五 永源法師)▽「秋の夕暮」「春の明ぼの」共に情趣を感じさせるものなのにという発想。

125 拾玉集・厭離百首・雜六七九679、新古今・哀傷八三四 ○蓬生…蓬などの生い茂った所。ここでは墓所の意。○露…「よもぎふ」「おく」の縁語。▽「夕暮」「明ぼの」共に露の置く時分。対をなす。命が今日明日をも知らぬという無常の表白。

十五番 心念不空過

左持

126 おしなべて空しき空と思しに藤咲きぬれば紫の雲

内秘菩薩行

右

127 いにしへの鹿鳴く野辺の庵にも心の月は曇らざりけん

左「心念不空過」、右「内秘菩薩行」、「紫の雲」・「心の月」、詞の寄せ、共にをかしく侍り。勝劣なかるべし。仍同科とす。

128 鶯の枝の移りにまよふ哉枯れたる木だに花は咲ども

〔拾玉集（未見）〕新古今・釈教一九四四 ○心念不空過：『法華

經』觀世音菩薩普門品の文句。心に念じて空しく過ぎざれば、能

く諸有（あらゆる）苦を滅せん。普通は、觀世音菩薩を心に念じ

て空しく過ぎざなければ、さまざま苦悩を失くせるの意。天台

智顛は、普門品に託して空仮中など諸相実相を説く。○空しき空

：「空」という概念のこと。○紫の雲：紫色をした雲。瑞雲とい

い、極楽往生の人の臨終には、阿弥陀三尊がこの雲に乗って迎え

にくるといふ。「紫の雲うちなびく藤の花千歳の松に掛けてこそ見

れ」（兼盛集一七六）。「雲」は「空」の縁語。

〔拾玉集（未見）〕新古今・釈教一九五〇 ○内秘菩薩行：『法華

經』五百弟子受記品の文句。内に菩薩の行を秘し、外にこれ声聞

なりと現わして。弟子の富楼那が、表面は小乗の声聞のように振

る舞い、内実は衆生を度して大乘の菩薩として努めていたことを、

釈迦が讚えた言葉。○鹿鳴く野辺：鹿野苑。中インドの波羅奈

国にあった林園で、釈迦が小乗經典を説いた。○心の月：悟り

に至った心を月の清浄なるものに喩えた。「いかでわれ心の月をあ

らはして闇にまどへる人を照らさむ」（詞花・雑四一四 顯輔）

〔長秋詠草（未見）〕○枝の移り：枝から枝へと移ること。○枯

れたる木：枯れてしまっている木ですら。▽枯れた木ですら花

を咲かせるのにと、自嘲気味に詠む。

客人十五番

一番

左

125 顔々かほがほにあはれあはれれぶぶことを頼たのむむ哉かな越路こしちの雪ゆきの深ふかき誓ちかひに

右勝

126 こゝに又光あを分わけてやどよす哉かな越路こしちの白嶺しらねや雪ゆきの古里ふるさと

左右ともに越路こしちの雪ゆきに寄よせて弘誓こうせの深ふかき心こころは同おなじく侍はべを、

右の「越こしの白嶺しらねや雪ゆきの古里ふるさと」、今少し勝まさるべくや侍はべらん。

▽客人：神体は白山妙理権現と同体（伊弉諾尊または菊理媛）。本

地は十一面觀音。

〔拾玉集（未見）〕○顔々に：顔ごとに。本地十一面觀音に拠る。

○あはれぶ：かわいそうだと思ふ。救済者としての能力。○越路

：越前・越中・越後のこと。神体の白山妙理権現に拠る。雪深い

地、春の到来が遅いとされる。▽十一面觀音は、あらゆる方角

（十方）に顔を向けたものという、救済者として持つべき能力を

具体化したもの。

〔秋篠月清集・神祇一五八八、続古今・神祇七三九〕○越の白嶺：

越前国の歌枕。福井県・石川県・岐阜県にまたがる白山のこと。

雪の深い所の代名詞。「年深く降りつむ雪を見る時ぞ越の白嶺に住

む心地する」（後撰・冬四九九 読人不知）

○弘誓（ぐぜい）：仏教語。一切の菩薩の、自らも悟りを開き、

また、衆生をも救おうと立てた広大な誓願。

二番

左

127 数かずならぬ水屑みづくずも捨すてず照あらすこそ塵ちりにまじはる光成ひかりけれ

右勝

128 古ふるき風かぜをいかで御山みに吹ふかせまし葛くずの裏葉うらばの返々かへかへも

右哥、こゝろ猶弘誓こうせなり。「御山みの古風ふるかぜ」、さだめて吹返かへかへし

侍らんかし。よりに勝ると申まをべくや。

〔拾玉集・当座百首・神社一四八八〕○数ならぬ：数えたる

だけの価値がない。○水屑：水中のゴミ。はかない身の上の喩

え。○照らす：慈悲の光を当てる。○塵にまじはる：自らの才

知を隠して、世俗に交わること。和光同塵。▽本地の十一面觀音

を詠む。

128拾玉集・北山樵客百首・述懐一九八二881 ○古き風：古き良き昔に吹いていた風。○御山：比叡山のこと。○葛の裏葉：風に翻って葉裏を見せることから、「恨み」に掛けるのが普通だが、ここでは「返々」に掛ける。「神なびの三室の山の葛かづら裏吹き返す秋は来にけり」(新古今・秋二八五 家持)

三番 花の哥あまたよみける中に

左

129 咲きそむる花の梢を眺むれば雲になり行み吉野の山

同

右勝

130 吉野山雲の岩根にちる花は風より落る滝の白糸

「両首「吉野山」、左の雲になりゆくらん心もをかしく侍を、右の雲の岩根の花、風より落つらん滝の白糸、殊に面白くや侍らん。」

131拾玉集・花月百首・花一三一〇1310、玄玉集・草樹五〇八 ○雲になり行：山全体が雲に覆われることを雲に見立てたもの。「桜花咲きにけらしなあしひきの山の峽より見ゆる白雲」(古今・春五九 貫之)

132拾玉集・四季雑各廿首都合百首・春三一七九2966(第二・三句 「雲の岩根の花ざかり」 ○雲の岩根：「雲」は花の咲いている状態の遠景の比喩。「岩根」は大地に根を下ろしたような大きな岩。雲のように見える山の岩根。○ちる花：山の岩根に散る花。異文「花ざかり」も同意だが、散る状態にまだ浅いものか。○滝の白糸：滝の流れを白糸に喩えたもの。ここでは風に舞う花びらの落ち行くさま。「山桜咲きそめしより久方の雲居に見ゆる滝の白糸」

(金葉・春五〇 俊頼)

四番 同

左勝

133 松風にながめし秋は花故に厭ふべしとも思はざりしを

同

右

134 花盛り霜も時雨も露もなしひとりつらきは春の山風

左哥、時々につけつゝ、心も変はり行こと、まことにあはれなる物に侍り。山家の秋は桂月すぐく照らし、松風しづかに吹おくりたる、まことに身を分くる心地こそはし侍れ。すべて春の風は厭はしかるべし。左勝り侍らん。

135拾玉集・花月百首・花一三三六1336、玄玉集・草樹五五五 ○松

風にながめし秋：松風に吹く風をながめていた秋には。○花故に厭ふべし：花を散らせるからという理由で風を疎ましく思うに違いない。○思はざりしを：思いもしませんでしたのに。

▽「秋」を引き合いにして、対となる「春」の様子を想起させる。春には風は花を散らせる物として嫌われる。

136拾玉集四六〇三2988 参考「峯に咲く花は谷なる木にぞさくいた

く厭はじ春の山風」(山家集一五五) ○霜・時雨・露：秋または

冬の季節に恨めしく思われる景物。○ひとりつらきは：ただ一

つの物だけが恨めしい。▽秋・冬の景物(霜・時雨・露)を引き合いにして、春の「風」を疎ましいとする。

○山家の秋：世を逃れて仏道修行の生活のなかでの秋。一層寂しさを感ずる季節。○桂月：月の別名。古代、月には桂の木があり、兎が住んでいるという中国の伝説に拠る。○身を分くる心地：自分の体の間に分け入るといった気持。しみじみと感じ入る気分。

五番 夏哥中に

133 雲迷ふ夕に秋をこめながら風も穂に出ぬをぎの上哉
左持

右

132 夕まぐれ野沢に夏を忘れ水げに秋近く飛ぶ螢哉

左「夕に秋をこめながら」といへる、いとをかしくはみえ侍り。右、又「野沢に夏を忘れ水」など詞つゞき、いづれも勝ると申がたし。良き持に侍べし。

131 拾玉集・四季雑各廿首都合百首・夏三二〇八2995、新古今・夏二

七八 ○雲迷ふ：雲が入り乱れるさま。○穂に出ぬ：穂が出ること。転じて表に現れ出ること。「風」と「萩」の両方に掛かる。風も穂がまだ出ない萩と同様に、音を立てることなく吹いている。

130 拾玉集・四季雑各廿首都合百首・夏三二〇九2996 ○野沢：野にある水と草の覆い低湿地。○忘れ水：野中の茂みや岩陰に隠れて、人の眼につかない流れ。○秋近く：秋の迫っている夏の終わり頃。もうすぐ秋が近いことを思わせる。

○良き持：歌合の判定は相対的なものだから、双方が良いこともあり得る。その意味において「良き持」とする。

六番 待月厭山

左

129 厭はじな山の端もなき波路にも待たでは月の出る物かは

月哥中に

右勝

128 夢かともおどろく斗晴にけり雲の衣を返す月影

左哥「待たでは月の」などいへる姿、艶にこそ侍けれ。右哥、雲の衣を返する心、猶をかしくや侍らん。

135 拾玉集（未見） ○厭はじな：厭うことはすまい。○待たでは

…（下に打消しの表現を伴って）待たなくては。○出る物かは：反語。出ることがあろうか。▽山の端のない波路でも待たなくてはならないのだから、山の端を厭っても仕方がない。

136 拾玉集・四季雑各廿首都合百首・秋三二一五3002（第二句「おどろく程に」） 本歌「天の川霧立ち昇る七夕の雲の衣のかへる袖かも」（万葉・巻一〇・二〇六七） ○おどろく斗：驚くほど。異文も同意。○雲の衣：雲を、織姫の着ている着物に見立てていう語。

七番 秋哥中に

左勝

134 夜半にたく蚊火屋の煙立そひて朝霧深し小山田の原

同

右

133 藻塩やく煙も霧にうづもれて須磨の関屋の秋の夕暮

「須磨の関屋」はすべてをりにつけつゝおろかならぬを、まして「秋の夕暮」、思やられ侍を、左の小山田の蚊火屋の煙に立そふらん朝霧深く、心ぼそくや侍らん。猶少しはたち勝ると申べくや。

137 拾玉集・四季雑各廿首都合百首・秋三二二七3014、新勅撰・秋二

七六（第二句「かひやがけぶり」） ○蚊火屋：蚊を追い払う火を

焚く家。一説には鹿や猪などが近寄らないように焚く火ともいう。○立そひて…（霧に）煙が加わって。○小山田の原：山あいの田に囲まれた原。

138 拾玉集・御裳濯百首・秋五四3553、新勅撰・秋二七七、玄玉集・

天地二四五 ○藻塩やく：海藻から採る塩を焼く。○うづもれぬ：霧と煙が融合して、区別が付かなくなりました。○須

磨の関屋：摂津国の歌枕。神戸市須磨区の海岸に播磨国との境を
なす須磨の関があった。

○をりにつけつゝ…季節ごとに。○おろかならぬ…いい加減で
はない。疎かには出来ない。○心ほそく…もの寂しく。マイナス
評価ではなく、美的価値として肯定されたもの。

八番 山ふかく住比、月を見て

左勝

129 山深み誰又かゝるすまひして槇の葉分くる月を見るらん

二条院御時、殿上のをのことも法勝寺にて月見けるに

右 釈阿

130 いかなれば沈みながらに年を経て代々の雲居の月を見つらん

此右哥、さすがに四代までの雲井の月を見けん事をあやし
みけるばかりに侍。左哥「槇の葉分くる月を見るらん」
と侍、心いみじくをかしく侍り。以左可為勝。

131 拾玉集五一五六824、千載・雑一〇二〇 本歌「山ふかみ槇の葉
分くる月影ははげしきものすごきなりけり」(山家集一一九九)
○誰又：私以外の誰か。○かゝる…このように厳しい環境の、の
意。○槇の葉分くる月…常磐木の葉の間を分け昇る月。

132 長秋詠草二四六、千載・雑一〇二四 ○法勝寺…白河院が洛東の
白河に建立した寺。○沈みながら…沈淪のまま。○夜々：「四
代」を掛ける。家集左注に「二条院御時也。為四代侍臣尚在雲客
列故云々」。○雲居の月…禁裏の月。「忘れじよ忘るなどだに言ひ
てまし雲居の月の心ありせば」(長秋詠草三六五。崇徳天皇讓位直
前の作)
○四代まで…崇徳・近衛・後白河・二条の四代。

九番 雪の哥中に

133 庭の雪にわが跡つけて出つるを訪はれにけりと人や見るらん
左 同

134 今朝見れば雪もつもりの浦なれや濱松が枝の波に漬くまで
右勝

左「訪はれにけり」といへる、心いとをかしく見え侍れど、
右の「雪もつもりの浦」と、心さまざま松の雪猶おもかけお
ほく侍りて、勝ると申へくや。

135 拾玉集・堀河百首・雪二五九259、新古今・冬六七九 ○わが跡：
自分の付けた足跡。○出つるを…誰かを訪問したのに(他人は知
らないで)意。○訪はれにけり…珍しくも来訪があったのだな
と。▽「訪ふ」に拘泥する所に山居の寂しさが滲み出ている。

136 拾玉集・北山樵客百首・冬一八九九136、続古今・冬六七〇、無
名和歌集・冬二五 ○つもりの浦…津守の浦。摂津国の歌枕。西
成区津守町から住吉にかけての海岸。地名を雪の「積もり」に掛
ける。○なれや…であるからか。○濱松が枝…浜辺に生えてい
る松の枝。○漬く…水に浸る。

十番 恋の哥中に

左勝

137 うちかへし思ふ心に慰めて恋に宿かる我涙かな
契恋

右

138 たゞ頼めたとへば人の偽りを重ねてこそはまたも恨め
左右の恋、共に心深くきこえ侍を、猶左恋に宿かるらん未
句、めづらしくも侍にや。勝るべくや侍らん。

139 拾玉集四三四一4027(第二句「あまり思ひに」) ○うちかへし…

繰り返し。また、思い返してみて。○思ふ心に…相手のことを思
う私の心を。異文「あまり思ひに」では度を過ぎて相手を私が思
うことをの意。○慰めて…せめての慰めとして。○恋に宿かる
…(恋というものに宿を借りる意から) 恋に事寄せる。

〔拾玉集・歌合百首・契恋一七二二1622〕新古今・恋一二二三、六
百番歌合・恋六八二 参考「たのめつつ逢はで年経る偽りにこり
ぬ心を人は知らなむ」(古今・恋六一四 躬恒) ○たゞ頼め…ひ
たすら信頼して下さい。○たとへば…さらに詳しく言えは。散
文的用語。○偽りを重ねて…不実な私が「ただ頼め」と約束をす
るのは偽り。その約束を破るのは「重ねて」。▽不実を疑う女に
今も変わらぬと約束したもの。

十一番 旅哥

左持

〔一〕 東路や清見が関の月の夜を数へてこそは思立ちしか

同

右

〔二〕 ながめつる空行月の行末に思も出でよ宇津の山守

両方の旅の心、またともにいづれを勝ると申がたし。左の
「清見が関の月の夜」、まことにさこそ数へて思立つべくも
おぼえ侍り。右の「宇津の山守」に月の行末まで思出でよ
とまことに言はまほしかるべし。仍同科とすべし。

〔拾玉集四七二八4413〕○東路…東海道・東山道など東国への道。

○清見が関…駿河国の歌枕。清水市興津町の西にあった平安時代
の関所。月の名所。○思立ちしか…思い立ちたいものだ。「しか」
は願望を表す語。

〔拾玉集・北山樵客百首・羈旅一九五三1853〕本歌「忘るなよほど
は雲居に成ぬとも空行く月の廻りあふまで」(拾遺・雜四七〇 読

人不知)・「駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人に逢はぬな
りけり」(伊勢物語・九段) ○空行く月の行末…空行く月が廻る
ように、再び廻り逢うこと。○宇津の山守…「宇津の山」は駿河
国の歌枕。安倍郡と志太郡の境の宇津谷峠のこと。後者の本歌に
抛り、夢にも人に逢うことはないけれど、そのうち自分を思い出
して欲しいという気持を籠める。

十二番 同

左

〔三〕 旅の夜に又旅寝して草枕夢の中にも夢を見る故

百首哥中に

右勝

〔四〕 生ける日の浮世の波にたゞよひて苦しき海の舟をしぞ思ふ

左の「夢の中にも夢を」見るらん、心をかしく侍を、右の
哥、「浮世の波にたゞよひて」と侍もとりくくにおぼえ侍れ
ど、右の末句、「明石の浦の朝霧」思被出で、終りの句、
詞・心こもりて勝ると申べくや。

〔拾玉集・日吉甫首・雜四八六486〕千載・羈旅五三三(初句)「たび
のよに」○旅の夜…「旅の世」か。三世輪廻の仮の世(現世)
を「旅の世」といった。○草枕…旅に掛かる枕詞。「枕」と「夢」
は縁語。○夢の中にも…はかない夢のような人生の中で。▽無
常のこの世の、旅と旅寝の夢を、出家者の立場で詠む。

〔拾玉集・四季雜各廿首都合百首・雜三二六七3254〕本歌「ほのぼ
のと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」(古今・羈旅四
〇九 読人不知) ○生ける日…生きている日。○苦しき海…仏
教語「苦海」の訓読。人が我執におぼれ苦しむのを海に喩えた語。
「阿弥陀仏と唱ふる声を梶にてや苦しき海を漕ぎはなるらん」(金
葉・雜六四七 俊頼)

十三番 述懐

左

〔三〕 あはれにも心のすむに寄せし身のやがて心の宿と成ぬる

同

右勝

〔四〕 せめて猶憂き世にとまる身とならば心の中に宿はさだめん

左右「述懐」、共に心深くは見え侍れど、右の哥「憂き世にとまる」といへる、心おろかなる心にも所存に侍にや。勝ると申侍ふし。

〔五〕 拾玉集(未見) ○あはれにも…悲哀や寂しさをしみじみと感じるさま。○すむ…「澄む」と「住む」を掛ける。「住む」は「宿」の縁語。○心の宿…心の落ち着く所。安住の地。

〔六〕 拾玉集・御裳濯百首・述懐五七三573 ○とまる…「行く」に対して居残る。留まる。▽浮世から遁れたいと思わずに「留まる」というのならば、という発想。

十四番 同

左持

〔七〕 さし離れ三笠の山を出しより身を知る雨に濡れぬ日ぞなき

聞法述懐

右

〔八〕 法の門に心を入れて思ふかなたゞ憂き世をば出べかりけり

左、「三笠の山を」離れて身を知る雨に濡れ、右、「法の門に心を入れて」「憂き世をば出べかりけり」と待心、共に事理叶へり。同科とすべし。

〔九〕 拾玉集・述懐百首一五四574、新勅撰・雑一一四〇 本歌「三笠山さしはなれぬと言ひしかど雨もよよには思ひしものを」(後拾遺・

雑九二七 和泉式部) ○三笠の山…大和国の歌枕。近衛職の異名をさすことが多いが、ここでは出自の九條家をさす。「さし」は

「笠」の縁語。○身を知る雨…我が身の不運を思い知らされる雨。「数々に思ひ思はずとひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」(古今・恋七〇五 業平)

(古今・恋七〇五 業平)

〔十〕 拾玉集・句題百首・雑九〇一581、続後拾遺・釈教一二七四 ○法の門…「法門」の訓読。仏の教え。○やはり出づるべきであるよ。▽仏の教えのすばらしいことを詠む。○事理…事の筋道。道理。

十五番 或住不退地

左持

〔十一〕 驚の山けふ聞く法の道ならで帰らぬ宿に行人ぞなき

金剛界五部中に金剛部を

右

〔十二〕 頼もしな憂き世中の破れ屋に光くだけぬ法の里人

両方、又勝劣なかるべし。猶持と申べくや。

〔十三〕 夜の鶴かたぐ思ふ籠の内を形をわけてあはれとをみよ

〔十四〕 拾玉集(未見)。新古今・釈教一九四三 ○或住不退地…「法華

經」分別功德品の文句。最高の悟りを得て、引き返すことがないこと。○驚の山…靈鷲山。釈迦が法華經などを講説した所という。○法の道…「法道」の訓読。仏の教え。○帰らぬ宿…もはや引き戻らない住処。「或住不退地」拠る。

〔十五〕 拾玉集・廿題百首・釈教二一〇六(ナシ)(第四句「独くだけぬ」)

○金剛界五部…金剛界曼荼羅の九会のうち、中央の羯磨会をさらに蓮華部・金剛部・仏部・宝部・羯磨部に分けたもの。金剛界は大日如来の智の面を表したもので、大日如来の理の面を表した胎藏界の対。○頼もしな…頼もしく思うことだ。○光くだけぬ…

仏の御威光が砕けることのない。異文「独だけぬ」ではただ砕けることのないの意。○法の里人：仏教を修行する人。

〔5〕長秋詠草（未見） 参考「夜の鶴みやこの内に放たれて子を恋ひつつも鳴きあかすかな」（詞花・雜三四〇 高内侍） ○夜の鶴：「夜鶴子を憶ひて籠中に鳴く」（白氏文集・新樂府「五絃弾」）に拠る。一途に子供を思う親の愛情の深さを喩える。○かたぐ：あれやこれや。○形をわけて：外見を判断して。

十禅師十五番

一番

〔6〕 左持
木の本の塵にまじはる影なくは朝日待間の闇いかにせん

右

〔7〕 本本にうき世を照す光こそ暗き道にも有明の月

左の哥、「朝日待間の闇」に切利天の御付囑たのもしく侍事也。右又「暗き道にも有明の月」、姿・言葉もをかしく侍り。勝負なかるべし。

▽十禅師：神体は瓊瓊杵尊、また一説に天兒屋根尊。本地が地藏。

ただし、本地には弥勒など諸説アリ。

〔8〕拾玉集（未見） ○塵に交はる：「塵」は濁つた世、俗世間の汚れ。神仏が本性を表さず俗世の人々と交わること。○影：光のこと。「陰」を掛け、庇ってくれる人、またその恩恵。○闇：往生

の妨げとなる心の迷い（煩惱）を闇に喩えたもの。▽地藏は、五濁悪世の救済を仏に委ねられており、六道を巡り、閻魔以下さまざまに姿を変えて人々を救うという。

〔9〕秋篠月清集・神祇一五八九、続後撰・神祇五六九 ○暗き道：往生の妨げとなる心の迷い（煩惱）に惑わされている状態のこと。

「闇」に同じ。○有明の月：真如の月。衆生の迷いを開く仏法の真理を月に喩えたもの。「いかで我心の月をあらはして闇に惑へる人を照らさむ」（詞花・雜四一四 頭輔）

○切利天：六欲天の第二。須弥山の頂上にあり、帝釈天が住むとされる。○付囑（ふしよく）：いいつけて頼むこと。

二番

左持

〔10〕 わが頼む日吉の影は奥山の柴の戸までも射さざらめやは

山籠りして侍ける比、騒動出来残物なく離山しにけるに、

たゞひとり留まりゐて、初雪のあした尊円法師がもとへ付ける

右

〔11〕 いとゞしく昔の跡や絶えなんと思ふもかなし今朝の白雪

この左右の哥、又もとより愚感難忍くして集に注入侍にしやうにこそ覚え侍れ。共に更勝劣なかるべし。よりて猶同科とす。

〔12〕拾玉集・述懐百首一八二、千載・神祇二二七五 ○日吉の影：

日吉明神の恩恵。「影」は光、日差ししので、「日」の縁語。○鎖さ：「射さ」に「鎖さ」を掛け、「戸」の縁語。○やは：反語。

▽安元二年（一一七六）からの、無動寺千日入堂の頃の述懐。叡山守護神の日吉明神の恩恵に期待する。

〔13〕拾玉集（未見）。千載・釈教二二二五 ○山籠り：前歌と同じく、

千日入堂のこと。○騒動：治承二年（一一七八）十月の堂衆合戦。○尊円法師：生没年未詳。藤原俊成男。母夕霧。のち伊行猶子か。建礼門院右京大夫の兄にあたる。○いとゞしく：いよいよ甚だしく。○昔の跡：天台の仏法の伝統。千載集詞書に「聖の跡絶たむ事を歎きて」とある。「跡」は足跡のことで、「雪」の縁語。

▽学統護持のため山に留まることにした強い決意の現れだが、支持者への訴歎。

○愚感難忍くして…底本「過感忍くして」を訂正。○集に注入侍にし…千載集に書き入れたこと。

三番 花

左勝

三 梢には花の姿を思はせて先咲く物は鶯のこゑ
同

右

三 花の色や猶濃からまし匂ふ枝に山ほとゝぎす据ゑてみたらば
両首の「花の心」、左は「鶯の声」先づ咲き、右郭公を据ゑんこと、右をかしく侍を、猶左の鶯先咲く花ならん事こと
にめづらしくも侍にや。仍以左為勝。

三拾玉集・花月百首・花一三〇七1307 ○花の姿…花を擬人化し、

花の容姿。○思はせて…想起させて。▽「咲く」という行為を抽象化して捉え、その先駆けとして「鶯の声」を詠む。

三拾玉集・花月百首・花一三二四1324 ○匂ふ…(花などが)美しく照り映える。○山ほとゝぎす…本来、立夏に鳴くべき鳥とされるが、ここでは里に降りる前の山郭公を配する。○据ゑてみたらば…反実仮想。枝に止まらせてみたならば。▽夏鳥の郭公を配することで季節の変化を感じさせる効果を狙ったか。

四番 残春

左

四 山の端に匂ひし花の雲消えて春の日数は有明の月
三月尽

右勝

四 くれなゐに霞の袖も成にけり春の別の暮方の空
右「春の別れの暮方の空」霞の空、色の深さもことに艶に侍べし。右をもて勝と申べくや。

三拾玉集・歌合百首・残春一七三〇1630、六百番歌合・春一八〇

○匂ひし花の雲…「匂ひし」は、色美しく咲くという視覚に訴える美しさ、嗅覚の「匂ふ」との両義を籠めていう。○春の日数…春の残りの日数。○有明の月…日数は「あり」に掛ける。旧暦では有明の月は月末に出るので、晩春の三月も残り少ないことを暗示する。

三拾玉集・楚忽第一百首・三月尽七二一721、玄玉集・時節三七七

○霞の袖…霞を衣装に喩え、そのたなびいた端を袖に見立てたもの。○春の別…春という季節が終わることを人の別れに見立てた。

○艶…上品で優雅な美しさ。余情美の一樣相。

五番 夏哥中に

左

五 山陰や岩もる清水音冴えて夏の外なる日ぐらしの声

同

五 夏深き峯の松が枝風越えて月影すゞし有明の山

右勝

左「夏の外なる日ぐらしの声」、いみじくをかしくは侍を、右の「有明の山」、ことに有がたく聞ゆ。勝るに侍べし。

三拾玉集・日吉百首・夏四二七27、千載・夏二一〇 ○山陰や…

「や」は間投助詞。初句で体言を受け、場面を提示し詠嘆を籠める。○音冴えて…音が冷たく感じるほど澄む。○夏の外なる…夏とも思えない。まるで秋のような。○日ぐらしの声…「ひぐら

し」の季は秋。▽清水・蝸という二つの聴覚表現を組み合わせ
て清涼感を出す。

155 拾玉集・北山樵客百首・夏一八五五1755、風雅・夏四三七、三百
六十番歌合・夏二六四 ○月影すゞし…峯を越えて吹く風によつ
て、月影までが涼しく感じられる。○有明の山…有明の月が山の
端近くに出ている山のこと。用例が少なく、新古今時代に始めて
詠まれた。「照り変はる紅葉を峯の光にて待つ月細き有明の山」(拾
遺愚草員外三七四)

六番 立秋

左持

156 それもなほ今日こそ主の身には染め心より吹く秋の初風

秋の哥よみける中に

右

157 人分かぬをぎの上風吹ぬなり山陰鳴らす秋の夕暮

両方の「秋風」、左「心より吹」、右、山陰ならすらん、と

もに更無勝劣。同科とす。

158 拾玉集・北山樵客百首・秋一八五九1759 ○今日…立秋となった

日。○主…恋の相手。○占め…占有して。独り占めして。

○心より…わが心から。▽風を擬人化し、恋する人のために吹く
とする。

159 拾玉集・北山樵客百首・秋一八六三1763 ○人分かぬ…誰彼の区
別することなく。○をぎ…その大きな葉に風を感じ、その葉ずれ
によつて秋を知る。「荻の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるるは
じめなりけれ」(拾遺・秋一三九 貫之) ○山陰ならす…山陰の
荻の葉が音を立てて風に翻るさま。葉ずれの音による印象的表現。

七番 月哥よみける中に

左

160 秋の夜の月のあたりの村雲を払ふとすれば荻の上風

同

右勝

161 月影の身にしむ音となる物は光を分くる嶺の松風

左の月、「払ふとすればをぎの上風」、いみじくをかしく
は待を、右の光を分くらん峯の松風、殊に身にしむおと、
なるらんと覚え待れば、右猶勝るべきにやと。

162 拾玉集・花月百首・月一三六三1363、玄玉集・天地一二七 ○村

雲…群がり立つ雲。○払ふとすれば…払うことをするとしたら。

順接の確定条件。○荻の上風…「荻」はその大きな葉に風を感じ、
その葉ずれによつて秋を知るといふ。

163 拾玉集・花月百首・月一三七〇1370、三百六十番歌合・秋三四二

○身にしむ音…しみじみと身に染み込むように感じる音。「音」を
印象的に捉える。○光を分くる…光を二つに区切るさま。

八番 鹿

左持

164 山里のあか月がたの鹿の音は夜半のあはれの限り成けり

同

右

165 鹿の音をおくる風に知れけり山の奥なる秋のあはれは

両方の鹿の声、左の「夜半のあはれのかぎり」、右の山の奥
のあはれ、ともに無勝劣。よりて同科とす。

170 拾玉集(未見)。千載・秋三二九 ○鹿の音…特に夜に聞く妻問
いの声は秋の寂しさを感じさせる。○あはれの限り…限りなく
あわれと感じる。「限り」はそのことを強調する表現。「いつはと

は時はわかねど秋の夜ぞ物思ふ事のかぎりなりける」(古今・秋一八九 読人不知)

三拾玉集・楚忽百首・鹿七四六〇〇〇 ○鹿の音：前歌同様、特に夜に聞く妻問いの声は秋のあはれを誘う。○知れけり：知る事が出来ることだ。○秋のあはれ：秋のしみじみとした情趣。

九番 冬のころ、人のもとへつかはしける

三〇 引き換へて寂しさがく野辺の月水らぬ露に宿りし物を

右勝

女御入内御屏風に、賀茂臨時祭かきたる所に

三二

月冴ゆる御手洗河に影見えて氷に摺れる山あみの袖

秋阿

左哥「氷らぬ露に」といへる、心いみじくをかしくこそ侍れ。右哥、これ又御屏風の哥の内を注して申て侍けるなり。これは「御手洗河に月冴えて」などは常の事なるを、「氷に摺れる」といへる、心ばかり少し面影多く侍によりて、「御屏風の歌撰りて奉れ」と侍りしにも、拙き哥の中には、これ一つにて點を合ひ侍し也。よりて猶左哥に勝ると申侍らん。かたはらいたきこと、よろしからずこそ覚え侍れ。

一七〇拾玉集五五六〇5244、玄玉集・天地三三三 ○引き換へし…うって変わって。○寂しさがく：寂しさを一層際立たせる。○氷

らぬ露：先ほどまでは、まだ氷らない露。○宿りし物を：宿していたのだけれども。逆接の確定条件。▽今は一変して、氷った露の玉に、「寂しさ」を磨いている野辺の月。

一七〇長秋詠草六四四、新古今・神祇一八八九、三百六十番歌合・冬五

五二、玄玉集・神祇六、文治六年女御入内和歌・臨時祭二五六

○女御：後鳥羽天皇女御任子(兼実女) ○賀茂臨時祭：十一月

下の酉の日に行われた。○御手洗河：上賀茂神社境内の河。

○影：小忌衣を着た舞人の姿。「月」の縁語。○氷に摺れる：「氷」は月光の比喩とも取れるが、実際の氷とした。氷に摺りつけたような。「冴ゆる」は「氷」の縁語。○山あも：トウダイグサの葉茎からとる藍色の染料で染めた衣は青摺りといい、節会などに着る小忌衣として用いた。

○面影：歌論用語。余情として、詩的イメージがありありと目に浮かぶこと。○御屏風の歌撰りて奉れ：各人詠進の屏風歌の撰歌を俊成に命ぜられたのであろう。○拙き歌：俊成自身の屏風歌。謙遜の表現。○かたはらいたきこと：心苦しい。自歌を勝としたからである。

十番 恋

左勝

一七四 玉章の跡だになしと眺めつる夕の空に雁鳴きわたる

同

右

一七五 我恋は庭のむら萩うら枯れて人をも身をも秋の夕暮

両首の恋、左、「玉章の跡だに」なかりける夕の空、雁書の列なりけん、心いみじくをかしく侍を、右の「人をも身をも秋の夕暮」、又その心不少。よりて同科とすべし。

一七四拾玉集・北山樵客百首・恋一九一—1811 ○玉章：手紙。消息。

○跡だになし：全く形跡すら無い。○眺めつる：物思いに沈みながらぼんやり見た。▽蘇武が雁の足に結び付けたという手紙が漢の帝に届いたという故事(漢書)に拠る。

一七五拾玉集・廿題百首・逢不逢恋二〇八二(ナシ)、新古今・恋一三

二二 ○村萩：萩は群生するという。○うら枯れ：枝・葉先の枯れること。晩秋か初冬の景。○秋：「うら枯れ」の縁で「飽

き」を掛ける。▽人のつれなき、自分の拙さが身に滲み、何をす
る気にもなれない様子。

○雁書：「雁の便り」とも。書簡。前歌同様、蘇武の故事（漢書）
に拠る。

十一番 百首の中に

左勝
昔思ふ高津の宮の跡ふりて難波の葦に通ふ松風

同

右
秋風に富士の煙のなびき行を待ちとる雲も空に消ぬる

左「難波の葦に通ふ松風」、殊にさびて聞こえ侍り。勝り侍
らん。

拾玉集・四季雑各廿首都合百首・雑三二五六3053、玉葉・雑二六
一四 ○高津の宮：摂津国の歌枕。大阪市。仁徳天皇が難波に造
営したと伝える皇居で、所在地は諸説ある。旧都のイメージを伴
う。○跡ふりて：跡が古くなって。○葦：難波は淀川河口の低
湿地で葦が生い茂っていた。

拾玉集・四季雑各廿首都合百首・雑三二六三3050 参考「風にな
びく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬ我が心かな」（新古今・
雑一六一五 西行） ○待ちとる：待ち受ける。

○さびて：旧都の松風が懐古の情と交錯しながら、難波の葦に吹
き通う。趣向を越えた静寂感を「さぶ」と答えたか。

十二番 述懐

左
思ふべき我後世は有か無かなければこそはこの世には住め

同

右勝

世中のうつゝの間にみる夢のおどろく程は寝てか覚めてか

左右述懐、共に深くみえ侍れど、右の「おどろく程は寝て
か覚めてか」といへる、ことにをかしめるべし。勝ると申
べくや。

拾玉集・四季雑各廿首都合百首・雑三二六六3053、新古今・雑一
八二七 ○思ふべき：いつも心に思っていなければならぬ。

○なければこそ：無いと思えばこそ（この世に住んでいるのだ
が）。▽下句は反語的表現を取りつつ、後世を信じたいという願
いを詠む。

拾玉集・四季雑各廿首都合百首・雑三二六五3052、新拾遺・哀傷
八六七 ○うつゝの闇：暗闇のような現実。○おどろく：はっ
として我にかえる。○寝てか覚めてか：夢心地の心情を問い掛
ける。「君や来し我や行きけむおもほえず夢かうつつか寝てか覚め
てか」（古今・恋六四五 業平）

十三番 円位上人、横川よりこのたびまかり出る事の、昔出

家し侍し、その月日にあたりて侍ると申たりける返
事に

左勝

憂き世出し月日の影のめぐりきて変はらぬ道をまた照らすらん
同行に契ける人、先立て大原に籠りたりけるに

右

世を厭ふ心の空の広ければ入る事もなき月も澄みなん
左「月日の影のめぐりきて」と侍、言葉の露、今少し光あ
るやうに見え侍り。

拾玉集（未見）。新古今・雑一七八四 ○円位上人：西行のこと。

○横川：叡山三塔の一つ。首楞嚴院がある。○その月日：同月同日。○浮き世出し：出家した。○月日の影：年月日の「月日」を天象のそれに取り成し、その縁で「影」と続ける。○変はらぬ道：昔は出家入山し、今日は横川から出山する、その往返の道を仏道に寄せて象徴的にいう。

〓拾玉集・厭離百首・秋六三六〇〇同行：僧晴真のこと（百首跋）。○大原：大和国の歌枕。愛宕郡大原の里。隠遁の地。○心の空：「空」は「月」「入る」の縁語。○入る事もなき月：山の端に隠れることもない真如の月。○澄みなん：「住み」を掛ける。○言葉の露：詩歌の情趣美。○光：輝くこと。

十四番 無常

左

〓 われもいつぞあたましかばと見し人を忍ぶとすればいとぞそひ行

右勝

同

〓 はかなさにかかて堪へまし是ぞ此世のことわりと思なさは
左右、共に姿・言葉をかしくは侍を、左は「なきが多くも」といふ哥なども侍を、右哥「世のことわり」といへる、心理、しかるべくめづらしくと侍にや。勝るべきにや。

〓拾玉集・四季雑各廿首都合百首・雑三二七二〇〇〇（初句「われもいつら」、新古今・哀傷八三五 本歌「世の中にあらましかはと思ふ人なきが多くも成りにけるかな」（拾遺・哀傷一二九九 為頼）〇いつぞ：何時。異文「いつら」ではどこの意。〇あらましかばと：元気でいらつしやたら良かったのにと。〇そひ行：数が増えてゆく。

〓拾玉集・御裳濯百首・無常五八〇〇〇〇、続拾遺・雑一三二六 ○堪へまし：（疑問を表す語と共に用いて）どうじつと我慢したものを

だろう。○世のことわり：世の中の定め。「秋風の吹けばさすがにわびしきは世のことわりと思ふものから」（後撰・秋二五〇 読人不知）○思なさは：思い込まなかつたならば。反実仮想。○しかるべく：そうなるはずである。

十五番 菩薩十度中、檀波羅蜜を

左持

〓 今はわれ山の端近き月をだにをしむまじとぞ思知りぬる

法師品

右

〓 心すむ草の庵の法の水にうれしく月の影宿すらん

両方勝劣なく侍にや。よりて持とすべき。猶、哥の道、かやうに知り顔に申侍事、返々かたわらいたく侍れど、かつは神鑿を恐るゝによりて所存かさねて申のぶべく侍也。

おほかたは、哥はかならずしもをかしく節をいひ、事の理を言ひ切らんとせざれども、本自詠哥といひて、たゞ読み上げたるにも、うち詠めたるにも、なにとなく艶にも幽玄にもきこゆる事有なるべし。よき哥になりぬれば、その言葉・姿の外に、景気の添ひたるやうなる事有にや。たとへば、春花のあたりに霞のたなびき、秋月の前に鹿のこゑを聞き、垣根の梅に春の風の匂ひ、嶺の紅葉に時雨のうちそゞぎなどするやうなる事の、うかびて添へるなり。常に申やうに侍れど、かの「月やあらぬ春や昔の」といひ、「むすぶ手のしづくに濁る」などいへる也。なにとなくめでたく聞こゆる也。

かやうなる姿・詞に詠み似せんと思へる歌は、近き世には有がたき事なるを、この近き年より此かた見え侍る御百首ども、かつはこの御哥合などぞ、まことに有がたきことゝは見え侍れ。

すべて此道は、いみじく言はんと思、ふるき物をも見尽くむなどするにも、更によらざるべし。かつはたゞ前の世の契なるべし。すべて詩哥の道も大聖文殊の御智慧よりおこれる事なれば、文殊の御垂跡もこの砌には跡を垂れ、社壇を並べておはしませば、この御哥合をばいづれにもいかばかりもてあそび、御納受侍らんずらん。当来普見如来も光を和けて、あまねくみそなはずらんとぞおぼえ侍る。

二〇 受け取りきうき身なりともまどはずな御法の月の入がたの空

二〇拾玉集・十題百首・釈教一五八四(ナシ) ○菩薩十度：十波羅密のこと。彼岸に到達するために、菩薩が実践すべき修行をいう。○檀波羅蜜：一切俗物を捨てた出家修行。「檀」は檀那の略で、布施のこと。○山の端近き月：間もなく稜線から消えてしまいう月。○をしむまじ：惜しむべきでない。▽自然への愛着を捨てることも檀波羅蜜の一つ。

二〇拾玉集(未見) ○法師品：『法華経』第十品。高原鑿水の喩を説く。○すむ：「澄む」「住む」を掛ける。○法の水：「法水」の訓読。仏の教えが衆生の煩惱を洗い落として清浄にするのを水に喩えた。○月：真如の月。衆生の迷いを開く仏法の真理を闇夜を照らす月に喩えた。

○知り顔：知っているような顔付き。○神鑿を恐るゝよりて：神の照覧する前で、自己の所存を正直に申し上げないのは恐れ多いので。○所存かさねて：俊成は前にも同様の所存を開陳しているの、「かさねて」と言った。建久六年正月民部卿経房家歌合と建久八年七月式子内親王に奉った古来風鉢抄にも以下と同様の内容を展開している。○かならずしもせざれども：趣向の面白さにだけ溺れる輩、あるいは事理をあらわに言い切るだけで満足する輩の多かつたことを思わせる。○読み上げたるにも：「声につきて」(古来風鉢抄)。歌の声調に基づくイメージを重視し、

そこに象徴的な余情の世界を見ている。韻律論的余情主義(藤平春男『新古今歌風の形成』)。○なにとなく：論理的に説明しにくいので、「なんとなく」というのである。○艶にも幽玄にも：民部卿家歌合では「艶にもをかしくも」、古来風鉢抄では「艶にもあはれにも」。複合的余情美である。○景気：歌論用語。言語によつて喚起される視覚的映像、絵画的イメージ。○うかびて：彷彿たるイメージとして。○「月やあらぬ春や昔の」：「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして」(古今・恋七四七 業平) ○「むすぶ手のしづくに濁る」：「むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな」(古今・離別四〇四 貫之) ○近き世：後拾遺集から千載集の時代。○すべて此道は：気取った不自然な態度やペダンチックな博学的態度を戒める。○文殊の御垂跡：「文殊菩薩」は智慧を司る菩薩。自歌合中の上七社に文殊を本地とする社はないので、文殊の御垂跡というのは不審。しかし、中七社の中の王子宮(神体は熊野王子不思議子)が文殊の垂跡と言われている。○当来普賢如来：文殊菩薩が来世(当来)で成仏した時の称号。

二〇長秋詠草(未見)。新勅撰・神祇五六〇 ○受け取りき：仏に縁のない衆生は垂跡の神々から受け取り済度するので、「受け取りき」と言う。○うき身なりとも：我が身は流転不安の身であるうとも。○御法：仏法の敬称。○月の入がた：月は入り方、つまり末法の世であること。

三宮十五番

一番

左勝

三つの山に散りしく法の花みればわが力ぞと慕ひきにけり

右

撰政

188 皆人に常にしたがつ誓ひよりあまねく匂ふ法の花哉

左右「法の花」、法花守護の心、共に勝負なかるべし。たゞし左猶三の山に散りしくらん、心少し勝るべくや侍らん。

▽三宮：神体は惶根尊、また一説に田心姫・湍津姫・市杵嶋姫の三
体。本地は普賢菩薩。

189 拾玉集(未見) ○三つの山…大津市下坂本あたりの琵琶湖畔三
津にある山。すなわち比叡山のこと。二つなき御法を百夜手向け
きぬ七ます神は三の山もと(拾玉集四七〇三) ○法の花：法華
経のこと。○力：頼りとし、支えとするもの。▽法華経では同
経を深く信奉する者のために普賢菩薩が現れ守護すると説く。

190 秋篠月清集・神祇一五九〇 ○したがふ…教えのままに振る舞
う。○誓ひ…神仏にかけて約束すること。○法の花：法華経の
こと。「匂ふ」は「花」の縁語。

二番

左勝

188 わが頼む七の社の夕だすき掛けても六つの道に返すな

右

190 末を汲めわが山川の水上に御法の淵は有と知らずや

左の「七の社の夕だすき掛けても六つの」などいへる、心、
ことにをかしくや侍らん。

189 拾玉集・北山樵客百首・述懐二〇〇四1903、新古今・神祇一九〇
二〇七の社：日吉山王七社(上七社)。○夕だすき…木綿襷。

「木綿(ゆふ)」で作った襷。神事に奉仕する時に掛けた。○掛
けても…上句を有意の序に、夕だすきを「掛けて」と続く。また、
「かりそめにも。決して」の意の「かけても」と掛ける。○六つ
の道…六道。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上という、六つ

の迷界。「六」は「七」と数の縁語。

189 拾玉集・十題百首・地儀一五一四(ナシ) ○末…将来。後世。
○わが山川…三川のこと。大津市東坂本を流れる川。○水上…比
叡明神は比叡山から流れる三川を遡って鎮座したという(耀天
記)。○淵…水がよどんで深い所。「瀬」に對する。

三番 春哥中に

左

191 武蔵野の春の景色も知られけり垣根に芽ぐむ草のゆかりに

同

右勝

192 霞しく松浦の沖に漕出てもろこしまでの春を見るかな

左の「垣根に芽ぐむ草のゆかり」、をかしくは侍を、「松浦
の沖にもろこしまでの」春を見るらん、心猶及がたく侍へ
し。

191 拾玉集・北山樵客百首・春一八〇九1709、新勅撰・雑一〇二七

参考「武蔵野の草のゆかりと聞くからに同じ野辺ともむつまじき
かな」(古今六帖・雑の野・一一五七) ○武蔵野…武蔵国の歌
枕。武蔵国に広がる野。○芽ぐむ…草や木が芽をふくらませる。

○草のゆかり…対象に縁故のある他のものにまで、その情愛が及
ぶこと。

192 拾玉集・日吉百首・春四〇三403、新勅撰・雑一三三三八 ○霞しく

…霞が一面に立ちこめる。○松浦…筑紫の歌枕。肥前国。東松浦
郡及び唐津市の虹の松原を中心とする唐津湾の海岸。○もろこ
し…唐土。昔、我が国で中国のことを指して呼んだ称。▽松浦の
沖に漕ぎ出て、唐土までの春を眺望するという、気宇壮大な発想。

四番 花の哥中に

183 花は杉吉野の山は三輪の山春のしるしは立ちまざるらん
左勝
同

184 雲は花花は雲とて今日過ぬ高嶺はるけし春の夕暮
右
両首の姿・心、共にをかしくは聞こえ侍を、猶左の「吉野の山は三輪の山」といへる心、春のしるし勝るべくや侍らん。

185 拾玉集・四季雑各廿首都合百首・春三一七八2895(初句「花杉よ」) 本歌「我が庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」(古今・雑九八二 読人不知) ○花は杉：花は(三輪山の)杉のようなものなのだの意。異文「花杉よ」では花の美しく咲き誇ることを杉に喩えたもの。○三輪の山：大和国の歌枕。桜井市三輪。大神(おおみわ)神社で有名。○春のしるし：春である証拠。▽本歌に拠りながら、吉野山の「春のしるし」の花を三輪山の杉と比定して詠む。

186 拾玉集・廿題百首・花二〇一八(ナシ)(同四七九三478「建久八年詠」) ○雲は花：花を雲に見立てる。「桜花咲きにけらしなあしひきの山の峡より見ゆる白雲」(古今・春五九 貫之)。○はるけし：遠く見渡される。▽「雲は花」「花は雲」共に同じ意で語呂合わせ。

五番 鶺鴒川

187 鶺鴒舟あはれとぞ見るものゝふの八十字治川の夕闇の空
左勝
家々納涼

188 宿からやすむ気色も変はるらん板井に清水庭に松風
右

右の納涼、共に涼しからんと覺え侍を、左の鶺鴒川、「八十字治川の夕闇の空」、哥のたけ・姿、ことに見え侍り。勝り侍べし。

189 拾玉集・歌合百首・鶺鴒川一七三九1699、新古今・夏二五一、六百番歌合・夏二二一 ○鶺鴒川：鶺鴒。夏の景物で、夜舟に篝火をたき、鶺鴒を使つて主に鮎をとる。○ものゝふの八十：「宇治川」の序。上代文武百官には多くの氏姓「八十氏」があつたので「宇治」に掛けたのだが、その「ものゝふ(武士)」に殺生のイメージが生かされている。○夕闇：月の後半、月の出の遅い頃の宵闇。▽「あはれ」は下句の叙景の他、殺生を生業とする鶺鴒の残酷、その悲哀なども含む。

190 拾玉集四二五七688(第二句「すむ心も」) ○宿からや：「から」は原因理由を示す。住処のせいだろうか。○すむ気色：涼しさを味わう自然の景色。異文「すむ心も」では涼しく感じる気分も意。○板井：板で囲んだ井戸。○たけ：格調・品位のこと。

六番 草花

191 鹿も虫も暮てあはれは添ふ野辺に萩こそ夜の錦成けれ
左
荻萱

192 主はあれど野となりにける籬哉小茅が下にうづら鳴也
右勝

左の草花、「萩こそ夜の」といへる、をかしく侍を、右「野となりにける」といひて、「小茅が下にうづら鳴也」と侍姿・心猶深くみえ侍り。勝ると申べくや。

193 拾玉集・廿題百首・草花二〇四二(ナシ)(同四八二〇4505「建久

八年詠) 参考「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」(古今・秋二九七 貫之) ○あはれは添ふ…一段と情趣が付け加わる。○錦…秋の盛りを錦に見立てた隠喩的表現。

198 拾玉集・楚忽第一百首・秋七四二742、新勅撰・秋二五〇 本歌

「野とならば鶉となりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ」(伊勢物語・一二三段) ○野となりける…荒れ果てて野になってしまった。○籬…竹や木で作った低く粗い垣根。○茅…丈の高い薄や茅萱(ちがや)・菅(すげ)などの総称で、屋根を葺く材料として用いる。▽本歌の世界を承けて、主が居るのにも関わらず、荒れて野となってしまった籬で、女の化身である鶉が鳴くと詠む。

七番 秋哥中に

左持

199 秋の野のすゞの篠屋の夕暮も猶身に負はぬすまひ成けり

月の哥中に

右

200 思ひ入心のすゑに月冴えて深き色ある山の奥かな

左の野辺の篠屋、右の山の奥深き色あらん、共に浅からず見え侍り。同科とすべし。

195 拾玉集・御裳濯百首・秋五四五545、御裳濯集三五一 ○すゞ…

簫。細く、背丈も低い篠竹。○篠屋…篠で葺いたわびしい家。○身に負はぬ…身にふさわしくない。似つかわしくない。

200 拾玉集・花月百首・月一三七八1378、玄玉集・天地一二八 ○思ひ入…一途に思い込む。思いつめる。○心のすゑ…心の行き着くところ。○深き色…深い情趣。風情。

八番 月哥中に

201 山の端に飽かて入ぬる月影は松の嵐に残るなりけり

月明かゝりける夜、三位入道のもとへ

右勝

202 紅葉ふく風のとよりに月落ちて霜に裏ある庭の面影

左右両首、入ぬる月の松の嵐に残りける、心いみじく深くは侍を、紅葉吹風に月落ち、「霜に裏ある」、心かぎりなく覚えそめ侍にしかばにや。猶勝るべくや。

203 拾玉集・花月百首・月一三九七1397、玄玉集・天地一八七 ○飽

かで…物足りないまま。○松の嵐…松の樹に吹く嵐。松風に近いが、深山に隠棲する人の孤独な心情を揺さぶる作用がある。「山深き松の嵐を身にしてみてもたれか寝覚めに月を見るらん」(千載・雜一〇〇五 家隆)

204 拾玉集五七二九5729(第五句「庭の面かな」) ○三位入道…俊成のこと。○風のとより…(擬人的に)風が使者として吹き伝えてくること。ここでは風によって吹き落ちた紅葉。○月落ちて…月が散り落ちた葉を照らすことを「月落ちて」と表現した。○霜に裏ある…霜越しに紅葉が見えることを「裏ある」とする。○面影…歌論用語。余情として、詩的イメージがありありと浮かぶこと。異文「面かな」では単なる叙景となる。

九番 時雨を

左勝

205 宵の間は洩らぬ木葉の袖ぬれて時雨になりぬ暁の空

落葉

右

206 時雨つる峯の村雲晴のきて風より降るは木葉成けり

「風より降るは」といへる、心いみじくをかしくはみえ侍

り。たゞし左の「時雨になりぬ」と侍る暁の空、なほことに聞こえ侍り。左や勝り侍らん。

203 拾玉集・十題百首・天象一五二〇(ナシ)。続古今・冬五五七、三百六十番歌合・冬四五二、無名和歌集・冬一六 参考「まばらなる真木の板屋に音はして洩らぬ時雨や木の葉なるらむ」(千載・冬四〇四 俊成) ○洩らぬ木葉・葉ずれの音が時雨に聞こえるが、実際には雨が洩るのではないので、「洩らぬ」と言う。○袖ぬれて…(あの人が来ないので)流す涙で袖が濡れて。○時雨になりぬ…まるで時雨に濡れたような状態になった。

204 拾玉集・歌合百首・落葉一七八六(58)、六百番歌合・冬四八二、三百六十番歌合・冬四五〇、無名和歌集・冬一八(第五句「にしきなりけり」) ○晴のきて…雲がどいて隠れていたものが現れること。○風より降る…風によって生じる葉ずれの音が時雨に聞こえるので「風より降る」と表現した。「降る」は「時雨」の縁語。第五句は種明かしをしてみせるが、異文「にしき」は様々に色変わりをした落葉を「にしき」としたもの。

十番 尋恋

左勝

205 心こそ行へも知らね三輪の山杉の木ずゑの夕暮の空

恋哥中に

右

206 富士の峯も浅間の山もおのづから絶えぐくにこそ煙立なれ

両首の恋、又共に勝劣なくは侍を、「杉の梢の夕暮の空」、姿も猶勝るべくや侍らん。

205 拾玉集・歌合百首・尋恋一七一五(15)、新古今・恋一三二七、六百番歌合・恋六五八 本歌「我が庵は三輪の山もと恋しくはとぶ

らひ来ませ杉立てる門」(古今・雑九八二 読人不知)・「わが恋はゆくへも知らず果てもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ」(古今・六一一恋 躬恒) 参考「夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて」(古今・恋四〇四 読人不知) ○三輪…大和国の歌枕。「身は」を掛け。「心こそ」に対照させる。▽相手の心も分からず、この先どうなるかも分からない不安な思いを詠む。

十一番 百首中に

左持

207 とく御法さくくの白露夜もおきてつとめて消んことをしぞ思ふ

菊を

右

208 浮き世かな齡のべても何かせん汲まず菊の下水

両方の菊、心共に無勝劣。同科とすべし。

205 拾玉集・厭離百首・秋六四一(64)、新古今・釈教一九三二(第三句「よるはおきて」) 本歌「音にのみきくの白露夜はおきて昼は思ひにあへず消ぬべし」(古今・恋四七〇 素性) ○きく…「聞く」と「菊」を掛ける。○おきて…「起きて」と「置きて」を掛ける。○つとめて…「勤めて」と「早朝の意との掛詞。「露の身の消えて仏になることはつとめて後ぞ知るべかりける」(詞花・雑四一二 読人不知)

208 拾玉集・楚忽第一百首・秋七五四(54) 参考「谷水洗花。汲下流而得上寿者三十余家」(和漢朗詠・九日付菊・二六四 紀長谷雄)・「濡れてほす山路の菊の露の間にいつか千歳を我は経にけむ」(古

今・秋二七三 素性) ○汲まらずは汲まらず…汲まないとすると汲むことはない。○菊の下水…菊の露。「山河の菊の下水いかなれば流れて人の老いをせくらん」(新古今・賀七一七 興風) ▽南陽(れき) 県(の)甘国には、菊の露が川の水となつて流れ、それを飲む人は不老長寿を保つという故事(芸文類聚所引「風俗通」に拠る)。

十二番 述懐

左

209 なに故に此世を深く厭ふぞと人の問へかしやすく答へん

同

右勝

210 皆人の知り顔にして知らぬ哉かならず死ぬる別れ有とは

左右述懐、又をかしくみえ侍れど、猶右の末句、まことにさることに侍り。勝ると申侍べし。

208 拾玉集・北山樵客百首・述懐二〇〇〇1899、新古今・雜一八二六

○人の問へかし…誰か尋ねてみるがよい。▽後世の存在と解脱の教えの真理を自明の事とする宗教者としての自覚。

210 拾玉集・楚忽第一百首・雜七九九99(第五句「ならひ有りとは」)

新古今・哀傷八三二(第五句「ならひ有りとは」) ○知り顔…知っているような顔付き。○別れ有とは…別れがあるとは。異

文「ならひ有りとは」では世の定めがあるとはの意。○さること…もつともなこと。

十三番 旅哥

左

211 草枕(かぢね) 仮寝(かぢね)の夢に入るものは出でし都(みやこ)の有明(あり)の月

同

212 帰りこぼ(かへ) 重なる山の嶺(たかね)ごと(と)に留まる心をしをりに(は)せむ

右勝 「出し都の(みやこ)有明の月」、まことに夢に(ゆめ)忘(わす)れ(は)たくは侍(はべ)り(は)れど、留まる心をしをりに(は)せんにせん事は(こと)にめづらしく侍(はべ)りし。勝るとすべし。

213 拾玉集・四季雜各廿首都合百首・雜三二五九3046 ○草枕…「旅

「かり」「ゆめ」などに掛かる枕詞。○仮寝…草の宿り。旅寝。

212 拾玉集・北山樵客百首・羈旅一九四三1843、新勅撰・羈旅五三六、三百六十番歌合・雜六〇九 ○帰りこぼ…帰ってくるのとすると。

○留まる心…魅力を感じ、捨てがたく思う心。○しをり…枝折。山道などで枝を折り道しるべとするもの。▽山を離れた者が戻ってきた時の情景を詠む。

十四番 百首の中に

左侍

213 春も秋もこゝには(は)しかじ夏刈(か)りの葦(あし)の丸屋(まるや)の雨(あめ)の夕暮(ゆふぐ)

旅哥中に

右 釈阿

214 夏刈(か)りの葦(あし)の仮屋(かり)もあはれ也(なり)玉江(たまえ)の月(つき)の明方(あかた)の空(そら)

此旅の哥、又「玉江の蘆を踏みしだき」といふ哥ののち、いとも見え侍らぬと思たまへて、「玉江の月」はよろしくやと思ひたまへ侍しを、「葦の丸屋の雨の夕暮」と侍りける、在明の月にさらに劣るまじく侍れば、同じと申侍。例の傍ら痛きかぎりなむ侍り。

213 拾玉集・四季雜各廿首都合百首・夏三二〇二2989 ○しかじ…叶

わなない。○夏刈りの…葦に掛かる枕詞。○葦の丸屋…葦で作った粗末な小屋。○雨の夕暮…「詠歌一躰」で禁制詞とされてい

る。「打ちしめり菖蒲ぞかほる郭公なくや五月の雨の夕暮」(新古今・夏二二〇 良経)

214長秋詠草(未見)。御室五十首・旅二九六、三百六十番歌合・夏二四八 ○夏刈りの葦の：「仮屋」の有心の序。○仮屋：仮に作った小屋。○玉江：俊頼髓脳では越前、五代集歌枕などでは撰津。

○玉江の葦を踏みしだき：「夏刈りの玉江の葦を踏みしだき群れる鳥のたつ空ぞなき」(後拾遺・夏二一九 重之) ○例の傍ら痛み：自歌を負とせず時としたので、例のごとく恐縮千万だというのである。

十五番 乗是宝車

左持

215 今ぞ知る今日の車にのりの道は門より外に有ける物を

不求自得

右

216 舟の内に年つむ人を思ふにも求めてこそは猶得ざりしか

左の門外、右の舟中、又勝劣なかるべし。同科に侍へし。

217 夢に迷ふ心の闇もあはれかけてかならず誘へ西に行月

218拾玉集四七六二447 ○乗是宝車：「法華経」譬喩品の偈中の文句。三車一車の喩。方便として声聞乘・縁覚乘・菩薩乘をそれぞれ羊車・鹿車・牛車の三種の車に喩え、実は牛車に喩えられる菩薩乘のみが真実の教えであるとする喩え。○のりの道：「法道」の訓読である仏の教えと、「乗り」を掛ける。○物を：逆接の確定条件。くだのに。けれども。

219拾玉集四七六三448(第二句「おひにし人を」) 参考「舟のうち浪の下にぞ老いける海人のしわざもいとまなの世や」(新古今・雜一七〇四 良経) ○不求自得：「法華経」信解品の偈中の文

句。長者窮子の譬喩。大迦葉が、声聞に對する未来成仏の予言を聞いて、求めもせずに無量の珍宝を得たような喜びを、窮子に喩える。○舟の内：遊女が色を売る舟の上。「舟中浪上、一生之歡会是同」(和漢朗詠・遊女七一九 大江以言) ○年つむ人：年齢を重ねる人。異文「おひにし人」ではそのまま年老いてゆく人の意。○こそくしか：逆接的に続くべき後続の文を文脈に委ねて表現せずに、余情として含ませる。

216長秋詠草(未見) ○心の闇：煩惱に迷う心を、闇に喩えていう語。○あはれかけて：情愛を注いで。○西：極楽浄土があるという西方。

此哥合者、判者俊成入道自筆判書之正本也。以信定(從四位小納言)令書之、為七卷。今為貽將來折重為一帖。去建久初之比、後京極撰政為納言之時、予詠哥之中、撰二百首(但百九十首也)為哥合。七社各十五番第一右哥、各詠加被番之。則令清書之給。又判者俊成卿所詠之歌中、可撰加七首之由相語之間、撰進之。仍每社加番之。則大宮四番右小比叡三番右聖真子五番右八王子七番右客人八番右十禪師九番右三宮十四番右哥等、是也。能書当世第一也。歌仙当世第一也。予本歌法施之餘、假世俗法樂。神国風俗尤可為珍歎。結構此法樂、彼臣殊取棄有沙汰。如存送之畢。令納七社宝殿畢。嚴親撰政(後法性寺殿)為結縁、又令加一首給。二宮第二番左哥、是也。又判者每卷與書付一首詠哥者也。其後、清書家撰錄運遂。以來予任天台座主、判者入道又保九十算。納受之至也。又其後、上皇令加和哥之道給之間、仁和寺御室守覺親王等、被詠進百首。其中荐有和哥召。又予餘命及七句之間、詠百首法樂諸社。剩上皇令撰新古今給之時、予所詠之哥、被撰入八十餘首之。現存之人無此例

歟。其新古今後、所詠之百首七ヶ度。其中歌定勝於昔詠歟。仍各申請弥重清書等納神殿者也。三十餘年之後、承久三年五月雨之比、記置之畢。于時(天下不静歟)後人勿嘲弄。努々。

承久三年後十月廿日書了。申受吉水前大僧正御本也。

(在判)

奥書○信定：源有雅息。能書。新勅撰作者。正四位下少納言讚岐守。

承久三年奉納本の清書を行ったこと。なお慈円は『六百番歌合』などにおいて、自らの筆名としても信定の名を使用している。○建久

初之比：本歌合には建久七年政変と相前後する三種の百首歌の詠が含まれているので、妥当ではない。○後京極摂政：慈円の甥藤原良経。「納言」についても、良経が権中納言に任ぜられたのは文治五年閏四月八日、同七月十日には権大納言に昇進し、建久六年十一月十日任内大臣まで権大納言である。しかし、建久九年詠の「四季雑

各廿首都合百首」が入集しているの、これもまた妥当ではない。○第一番右歌：良経がその歌七首を詠み加え、各社一番右に番えた。○可撰加七首：俊成のそれまでの詠歌中から七首を撰出し、各社に加番した。○能書当世第一也：もとの自歌合の清書は良経。

○歌仙当世第一也：底本「哥仙当第一也」を書陵部本で修正。「哥仙」とは慈円の他、追加された良経・俊成などのこと。○予：慈円のこと。○法施之餘：底本「法絶之飼」を書陵部本で修正。仏者が

仏法を説教することの補足として。○彼臣：良経のこと。○令納七社宝殿畢：結番の時点で七社宝殿に奉納したことを示す。○嚴親撰政：藤原兼実。良経父、慈円兄にあたる。結縁のために一首(二宮第二番左)を加えた。○判者毎巻奥書付一首：判者俊成はさ

らに各社末尾に一首を付加した。○清書家撰録運遂：本歌合を清書した良経が建仁二年十二月二十五日に撰政となったこと。○予任天台座主：初度は建久三年十一月だが、本歌合奉納の後に建仁元

年、建暦二年、建保元年と三度も還補されている。○判者入道又保九十算：建仁三年十一月に俊成九十賀を賜う。○被詠進百首：正治二年初度百首のこと。○八十餘首：慈円の新古今入集歌数は九十二首。○所詠之百首七ヶ度：新古今後には他にも内大臣家百首・建保仙洞百首などを詠んでいるが、ここは諸社法衆百首群を指すか。北野・八幡・伊勢・賀茂・難波・日吉・春日(二種あるが、片方は「草」とある)で七種となる。○三十餘年之後：承久三年から約三十年遡ると、建久元年頃になるが、それが妥当でないことは前述した通り。

**Annotation to Priest Jichin's own poems
in the form of Competiton (II)**
(慈鎮和尚自歌合)

Hajime ISHIKAWA

ABSTRACT

It is proved that Priest Jichin's own poems (慈鎮和尚自歌合) were composed in the end of 1198 (建久九年). His post script shows the process of their composition. Also it is known

that Fujiwara Shunzei (藤原俊成), judge of the poem's competition, developed his theory of making poems.

This study dealing with the latter half (八王子・客人・十禅師・三宮), gives annotation to difficult phrases and poetic expressions.